

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ゴーラクプルの駅前ホテルのバルコニーから、駅前広場を見おろして、私は思わず目を見張った。そこにテントが、甲 びつしりと並んでいたのである。

¹ 驚いたのは、そのテント小屋の屋根だった。その、ブリキ小屋にさがった「カーテン」だった。広場を走りまわって遊ぶ子どもたちのシャツだった。どれもこれも、なんとまあ、つぎはぎだらけなことか！ いや、つぎという言葉は乙 適切ではあるまい。つぎというのは、本体があつて、それに部分的な修理、補修をほどこすものなのだから。ところが、テントの屋根も、カーテンも、子どもたちのシャツも、本体より補修部分のほう²が、はるかに面積が広いのである。

それは、まことに奇妙に私の目に映った。² そんなにたくさん²のつぎを当てるなら、いつそのこと、大きいつぎのほうを本体にしてつくり直すほうが早道ではないか。つぎを本体にするほうが得策ではないか。しかし、彼らは絶対に本体を手放さない。最後の最後まで、もとを保存しようとしている。

おそらくインド人にとって、形あるものはすべて生きたものなのだろう。神の息吹いききのかかったもの、神のつくりだしたもの、むずかしくいえば「実体」なのであろう。だから、たとえば衣類なども、シャツに至るまで人間と同じように扱おうとするのだ。

人間は、たとえ、両手、両足が a 義手、義肢であつても、人間である。そして、かりにそつした人工的な部分が本体より多くなり、面積が広がっても、人間の本体を X 人はいないであろう。それと同じなのである。どんなにシャツが破れても、シャツはシャツである。それに当てるつぎはその実体を保持するためのものにすぎない。だから、つぎを本体にしてつくりかえるなどということとは、とんでもないことなのだ。インド人は、つぎだらけのシャツのなかに、シャツの本体を見ているにちがいない。補修部分が全体の十分の九を占めるカーテンのなかに、b もとのカーテンを見ているにちがいない。だから、彼らは捨てないのだ。捨てることは実体を抹殺すること、神の息吹きを吹き消すことだと思つて、捨てることを 拒むのである。インドでは牛の糞ふんに至るまで捨てられることがない。糞は争つて拾われ、太陽に干して貴重な燃料になる。その習慣は、三千年、五千年もの間つづいて

いるのだ。シャツや牛の糞ばかりではない。³ 彼らは、風俗も、習慣も、信仰も、ありとあらゆるものを何千年もの間、保持しつづけてきたのである。

それにくらべて……と私は頬杖をつきながら、日本を考えた。日本はおよそ逆ではないか。以前ニユースで見たのだが、どこかの神社が社殿の補修工事をするために、境内にある樹齢何百年かの大木を切り倒して四百万円で売ったという。何の木だか知らないが、少なくともその木は数百年の歴史を生きてきたのである。それを惜しげもなく切り倒して金に替えるという精神。考えてみれば、日本人は、チョンマゲも刀も、それといっしょに廃仏毀釈といつて仏さままでも未練なく捨て去った。それらを捨てることで新しいものをつくりだし、その新しいものを、さらに新しいものへと惜しげもなく取り替えてきた。歴史そのものが「切り捨て御免」の歴史であった。ものばかりではなく、伝統的な営みも、そして何より大切な精神的価値までもいさぎよく捨て去った。

私の子どもころには、駅のホームにも、学校の運動場にも、公園にも、水飲み場があった。コンクリートの杭に水道の蛇口がついていて、その蛇口に、かならず鎖でアルミニウムのコップがぶらさげられていた。水を飲むときにはそのコップを水でゆすいで、それからなみなみと注ぎ、一気に飲み干した。そのうまさといったら！

コップは例外なくデコボコだった。何人がそのコップで水を飲んだかわからない。いまの子供たちなら、不潔で不衛生だというだろう。それより、飲んだら捨てる紙のコップを置くほうがいい、と。しかし、新幹線やジェット旅客機のなかで飲む紙コップのアイスウォーターより、デコボコのコップで飲んだ水のほうが何十倍もおいしかった。何よりも、デコボコのコップには歴史があった。何人も人間がこれで喉をうるおしたという歴史が。そして、その歴史がコップの実体を、実体としてのコップを、ほんとうのものとしてのコップを、つくりあげていたのだ。デコボコのコップは、水を飲むためのAとしてそこにあるのではなく、Bとして、大げさにいうなら神の息吹きとしてそこにあったのである。

ところが、いまはどうであろう。水飲み場のコップは使い捨ての紙製になり、便利になったが、⁴ 実体的にはまったく希薄になった。

私は、古いものはいいものだ、といおうとしているのではない。家具や道具は、機能的に進歩すれば、それだけ便利になる。不便な道具より便利な道具のほうがいいにきまつている。

□、機能という面ばかりに目を向け、便利さばかりに気をとられていると、やがてそれは空虚さを、実体の喪失感を呼びびます。

便利さを性急に求める日本人の心性は、アメリカの能率主義にとびついた。そして、またたく間に「使い捨て文明」「インスタント文化」をつくりあげた。最近では高層ビルのなかに爆薬を仕かける装置がちゃんと設計されているという。こわすときに便利ないように、である。ビルはせいぜい数十年で老朽化するから、そのとき破壊し、新しく建て直すことを考えに入れておくというわけだ。「使い捨て」はビルにまで及んだのである。赤ん坊のおむつや、ライターばかりではない。

私は「使い捨て」「商品を悪いとはいわない。□ある品物については、使い捨てたほうがいい場合がある。私がいいのは、そのような「使い捨て」が招くであろう「使い捨て」の報酬についてである。使い捨てしているうちに、いつの間にかそれ以外にものが考えられなくなってしまうような「使い捨て精神」の支配である。

便利さを性急に求める「使い捨て」の心性は、まもなく人間そのものにまで及ぶであろう。次にやってくるのは、人間の使い捨てである。人間の使い捨てとは何だろう。それは人間をひとつの実体としてではなく、一個の機能としてしか考えないような人間の扱い方である。たとえば会社の、□家庭の、その他さまざまな人間組織のなかの、一個の役割としてしか人間を考えないおそれるべき心性である。そのとき人間は、人間としての役割を捨てて、役割としての人間になってしまつてある。そして、そのような役割としての人間は、その役割が解かれたとき、人間を解かれることになるのである。□人間は次々に使い捨てられる物品か道具のようになってしまつてしまふ。

いや、げんにそうなりつつあるではないか。役割を解かれた老人は家庭から疎外される。たがいに役割を認めなくなった夫婦は、未練もなく離婚する。⁵最近の人間関係のおそれるべき荒廃は、こつした使い捨て文明のもたらした報酬以外の何ものでもない。

ハイデッガー流にいうなら、それは「詩」の喪失ということであろう。私はそれを「実体」の喪失といたい。「実体」の喪失

とは、その人間が、その物品が、存在しつづけてきた、そして、これから存在しつづけるであろう「歴史」の抹殺にほかならない。だとすれば、いま、私たちにとっていちばん大切なことは、あらためて「歴史」というものを考え直してみることではないか。なぜなら、「歴史こそが「実体」の生みの親だからである。

原形があつてこそ、つぎは当てられる。「使い捨て文明」の錯覚は、つぎを原形のように思い込むことである。つぎは、あくまでもつぎでしかないのだ。

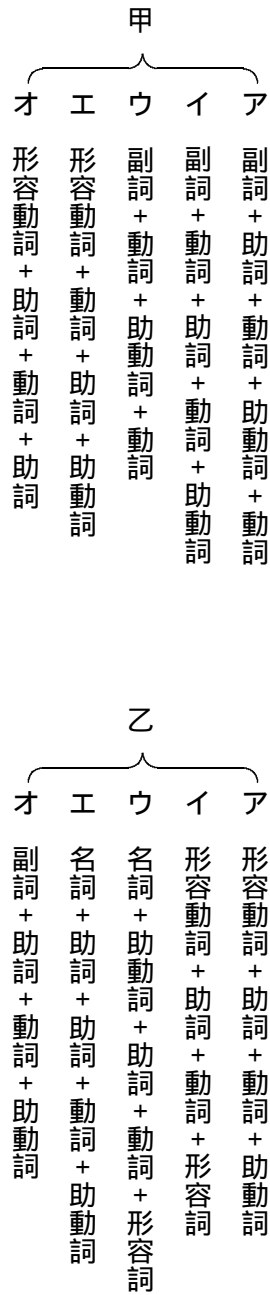
(森本 哲郎『豊かな社会のパラドックス』より)

注　　ゴラクプル：インドの地名

廃仏毀釈：明治時代初期、仏教を排斥しようとして寺などを壊したこと

問一　~~~~~線部　　の漢字の読み方をそれぞれ答えなさい。

問二 〓 線部甲「びつしりと並んでいた」、乙「適切ではあるまい」の文法的説明として正しいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問三 〓 線部1「驚いた」とありますが、筆者がどのようなことに「驚いた」のかが分かる部分を、「〜こと。」に続くように本文中から五十字以内で探し、その最初と最後の五字を抜き出さなさい。

問四 〓 線部2「そんなにたくさんのおぎを当てるなら、いつそのこと、大きいおぎのほうを本体にしてつくり直すほうが早道ではないか。おぎを本体にするほうが得策ではないか」とありますが、インド人はどのように考えていると筆者は述べていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 形あるものはすべて神がつくりだしたもので、つぎも本体と同様に大切なものである。
イ つぎを当てるための布は一つ一つがとも小さいので、つぎを本体にすることは不可能である。
ウ 本体が古くなってしまつと、つぎを当てるしかないが、本当は自然そのままの状態が好ましい。
エ 牛の糞さえ捨てないのだから、つぎだらけであっても、人がつくつたものは大事にすべきである。
オ どれほどたくさんつぎが当たっていたとしても、つぎは本体にとってかわることはできない。

問五

X

に当てはまることばとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア もてあます

イ つのみにする

ウ いつくしむ

エ ないがしろにする

オ よりどころにする

問六

——線部3「彼らは、風俗も、習慣も、信仰も、ありとあらゆるものを何千年の間、保持しつづけてきたのである」

とありますが、「彼ら」に対して日本はどつであるかが最もよく分かる一文を本文中から探し、初めの五字を抜き出しなさい。

問七

A・B

に当てはまることばとして最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 心性

イ 実体

ウ 信仰

エ 物質

オ 機能

問八 —— 線部4「実体的にはまったく希薄になった」と筆者が言うのはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア アルミニウムのコップはかなり昔からあるが、紙コップの歴史はまだまだ浅いから。
イ 紙コップはアルミニウムのコップと比べて、かなり薄く軽くなってしまったから。
ウ アルミニウムのコップにあった不潔さや不衛生さが改善され、安心して飲めるから。
エ 紙コップで飲む水は、水本来の味が損なわれ、あっさりしているように感じるから。
オ 紙コップには、多くの人間がそれで喉のどをつるおしたという歴史が感じられないから。

問九 筆者は本文中で「実体」ということばを用いていますが、「実体」の例として適当なものを、……………線部a～dよりすべて選び、記号で答えなさい。

問十 に当てはまることばとして最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア あるいは イ ところで ウ しかし エ こうして オ たしかに

問十一 —— 線部5「最近の人間関係のおそろべき荒廃」とありますが、筆者はどのようなことが原因だと考えていますか。五十字以内で答えなさい。

□ 次の文章は、村田喜代子の小説『鍋の中』の一節である。消息不明であった「おばあさんの弟」が、現在ハワイで農園を経営していることがわかった。夏休み、「わたし」の両親や、叔父叔母達は、「おばあさんの弟」のもとへ出かけ、その間子ども達は田舎の「おばあさん」の家で過ごすことになった。本文は「わたし」と弟の「信次郎」、いとこの「みな子」と「縦男」が「おばあさん」の家に到着する場面から始まる。これを読んで、後の問いに答えなさい。

わたし達が到着した夕方、おばあさんは広い台所の中の全部の戸ダナをひらいて探しものに a センネンした。板張りの床に彼女は古い大きな鍋を並べた。探してもみつからない鍋があるらしく、おばあさんはそれを毎日使っていた頃の記憶をおもいだそうと首をひねったり頭をかしげたりする。

「蒸し鍋はここにあるけれど、はて、そのフタはどこだろう」

彼女はかさねた鍋をひとつひとつ持ちあげて底をのぞいてみる。しかし、蒸し鍋のフタはたぶんみつからないだろう、とわたしはおもった。なぜならフタはさつきおばあさんが背のびしてのぞいた戸ダナの上に、古い味噌桶のフタの代用として載っていたのだ。わたしが教えないかぎりそのフタは降りてくることはできないのだった。もうおばあさんの十六とか十七になる孫達が、ふかし芋や南瓜まんじゅうなどみむきもしないことを彼女に告げてはいけないのだとわたしはおもっていたのである。

「さあ、わたしは今日からがんばらなくっちゃ」

鍋のフタをあきらめたおばあさんは、かがんでいた腰を立ててそういった。

「鍋もそろった。孫達もそろった。ではそろそろはじめましょ」

それからおばあさんは古鍋を流し台に運んで行った。きのうまで彼女の使っていた小鍋はかわりにしまいこまれた。そのとき奥の b ザシキからオルガンの音が流れてきた。おばあさんは水道の蛇口に手をかけたまま 2 息をついた。古い鍋のつぎに古いオルガンが鳴りだしたのだ。

縦男は右手だけでちよいちよいとひく。彼は四人の孫の中ではいちばん年長の十九歳だった。大学に入った年の、もう絶対に今

年は勉強というものをやらないと決めた夏休みだったので、縦男は家の中をのんびりながめ歩いていた。オルガンの発見は縦男のためにもおばあさんのためにも、なにか幸福な気分をもたらすようだった。

『野ばら』をひいてみておくれ、とおばあさんは注文した。

けれどけれど、縦男のひくオルガンの音とともに作ったおばあさんの料理は、もう口ではいいあらわせないくらいまずかった。南瓜と高野豆腐と鶏肉を煮たものであったが、鶏と高野豆腐は鍋の中でみわけがつかないほどまっ黒で、南瓜のほつはというと、もうその姿はどこにも残ってはいなかった。ぐずぐずに煮溶けてしまっって煮汁をどろどろに変える役目を果たしたのだ。

そしてこれらのものはただもつ醤油辛くて、わたしの舌を、チチみあがらせた。わたし達はしいんと押し黙って、口を動かした。うっかり口にはうりこんでしまったものの持つて行き場がない。わたしの舌はこのひどい食べ物のをせたまま、A 途方にくれてさまよっているようなぐあいである。

ところがおばあさんは、もごもごと口を動かし、
「おいしい、おいしい。みんなと一緒に食べるごはんは、d カクベツだねえ」などといって、たちまち小さな茶碗に二膳のごはんを食べてしまった。

わたし達はこうして田舎の第一日目から、おばあさんの作る食事に絶望したのだ。二日目はさらにひどく、三日目はさらにe シンコクだった。

三日目の夕食の最中、いきなり信次郎は彼女にむいてこういった。

「おばあさん。明日から姉さんに作らせてよ。おれ、そのほうがみんなのためにいいとおもっんだ。おばあさんだってらくになるつれ」

4 わたしとみな子と縦男は茶碗をかかえたまま、首をすくめて目をつむった。おばあさんは哀しそうな表情で、お皿の中の煮崩れたまっ黒い魚に目を落としたのだった。

わたしが彼女から台所仕事を任されたのには、そんなおばあさんに大變氣の毒ないきさつがふくまれていた。

おばあさんは煮物が好物である。

翌日わたしがおばあさんに代わって作った献立は、海老と蓮根の炊き合わせだった。わたしは信次郎を荷物持ちにして、山の下の町まで買物に出かけてそれらの材料を仕入れてきた。

おばあさんは煮物の入った盛鉢を両手にささげ持って、涙を流して喜んでくれた。

「たまちゃんがつくってくれた」といって、盛鉢に頭を垂れて礼拝をしたのである。

わたしはあくる日は茄子と牛肉と蒟蒻の炊き合わせを作った。そのつぎの日は蕪と豚肉のいため物で、そのつぎの日は鶏レバーと葱とピーマンを炊いた。鍋は毎日カラになった。

受験勉強から脱出することができた縦男は、オルガンをひき、本を読み、そしてたいてい昼寝をする。高校二年生のみな子も髪にカーラーを巻いたり、爪を磨いたり漫画をみたりして、やはり勉強に身が入らない。弟の信次郎は中学生だが外にばかり歩いている。ただここは田んぼとお寺と池と竹やぶしかない田舎なので、不良少年達につれていかれる心配はない。

わたしは家では、いつまでも帰ってこない弟のために夕暮れの道に「ムカえに行かされたものだった。」

……きのうは人参と蓮根と里芋を炊いた。わたしは明日は、何と何を炊いたらいいのだろうか……。

ここは高地で、夏も涼しい。台所に流れこむ風もすずやかである。わたしが毎日おばあさんの大きな古鍋と奮闘しているのを、みな子は同情してながめていた。

「こんなところまできて料理当番なんて」

と彼女はいうのだった。

けれど、わたしは、もともと毎年学校が夏休みになると母にいわれて熱気のコもった台所でそれをやらされていたので、この涼しい家の台所仕事をみな子のかんがえるほどには苦痛におもっていなかった。わたしは小さなときから、母にじゃが芋を切らせてほしいとねだるような女の子だったのである。

雨のあがった夜、縦男の母からおばあさんに電話があった。縦男の母とみな子の母とわたしの母の三人で、今日ハワイから帰っ

てきたという報告だ。父達の方はやはり仕事が気になって先に帰っていたもようである。

「どんな家に住んでるって？」

みな子が身をのりだす。

「聞かなかった」とおばあさん。

「その家、子どもいるっていつてなかった？」と信次郎。

「知らないよ」

そして⁵おばあさんは、そんなに尋ねたかつたら親も帰ったことだから、じぶんの家にみんなお帰り、といった。

濃い緑色の葉っぱのあいだに、赤い実がぶらさがっている。夕日のようなトマトが五つ、畑になった。

「ほれ、たみちゃん。カゴをお出し」

腰を曲げて畑に入ったおばあさんの上半身はみえない。ねずみ色のワンピースのお尻^{しじ}だけが、畑の上に動いていた。

わたしは手に持っているカゴをわたした。おばあさんは今朝は三個のトマトをもちだ。これはいまから帰って帰って朝食のお皿に載せるのだ。

「ついでに畑蓮根もつむむといい」

おばあさんがいうので、わたしはそれを五、六本、カゴに加えた。細長い三角帽子みたいなのに、小さなつぶ毛が生えており、うっかりなでるとつぶ毛が指に刺さる。

「ほれ、もうひとつおまけ……」

りっぱに膨れた茄子が一本、ほつりこまれる。手の中のカゴが茄子一本分だけ重くなった。おばあさんは腰をのばし頭のタオルを手で押さえてのびをした。

それが帰りのしるしである。

畑を出て家の塀をまわって門の前に行く。朝が早いので道は明るかったが、ゆづべの虫がそのまま鳴きつづけていた。草やぶの中から湧きあがって空へ抜けていくので、虫の声はもつとこと言わずばらまかれ、降るように聞こえた。清らかな河を渡るように、わたしとおばあさんはひたひたと歩く。

門を入れて戸のところに来たとき、おばあさんはようやく、

「帰らなくていいのかい？」と、ぼつんといった。

「まだいいの」

おばあさんの顔が、ほっとやわらかになった。

おばあさんの家に来て、みな子は早起きの習慣がついた。わたし達四人は結局まだこの家にいつづけることになって、帰る日は延期したけれど、みな子の良い習慣はやがていいお土産になるだろうとわたしはおもった。

そういえば勉強はたいしてすすまなかったが、⁶ みんなにかお土産をみつけることができたのである。 信次郎は外に遊びに行つて日焼けし、漫画を読むくせが離れた。縦男はオルガンが両手でひけるようになった。それらはとても 画期的なこと ^B だった。わたしは五人の人間の食事の世話をすることで、手伝うということと管理するということがまるで違つことに気づくようになった。それは大きくなつてもたぶん、わたしのもの見方や考え方に良い影響を与えるだろうとおもわれた。

わたしは台所の窓の前に立っていた。

遠い家の庭先で鳴く鶏の声が聞こえてくる。

わたしはじぶんの心が風のようにすぎとおるのをかんじた。

問一 〜〜〜〜線部 a〜f のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 〜〜線部 A「途方にくれて」、B「画期的」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|----------|-----------------|-------|---------------|
| A 途方にくれて | | B 画期的 | |
| ア | どうしても我慢できなくなって | ア | 今までになく新しい様子 |
| イ | どうしたらいいのかわからなくて | イ | 大変すばらしい様子 |
| ウ | 何も感じる事ができなくて | ウ | みな同じである様子 |
| エ | 途中で困ってやめようとして | エ | 次第に良くなっていく様子 |
| オ | なんとかして避けようとして | オ | 時代の中心になっている様子 |

問三 〜〜線部 1「さあ、わたしは今日からがんばらなくっちゃ」「とありますが、「おばあさん」は何を「がんばらなくっちゃ」と思っているのですか。十五字以内で答えなさい。

問四 〜〜線部 2「息をついた」とありますが、この時のおばあさんの気持ちについて、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 水がつめたくてひどくびっくりにした気持ち
- イ たくさんの食事を作ることにつんざりした気持ち
- ウ オルガンの音に昔を思い出し悲しい気持ち
- エ 古いオルガンの音を聞いてうれしい気持ち
- オ 鍋のフタがみつからずがっかりした気持ち

問五

——線部3「わたし達はしいんと押し黙って、口を動かした」、4「わたしとみな子と縦男は茶碗をかかえたまま、首をすくめて目をつむった」において、「わたし達」はそれぞれのように思っていますか。最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア おばあさんの料理はまずいが、おばあさんのまごころがうれしく、満足に思っている。
- イ おばあさんの料理はまずいが、姉が代わって作ってもさほど変わらないだろうと思っている。
- ウ おばあさんの気持ちを思うとかわいそうだが、別の料理担当者がいたほうがいいと思っている。
- エ おばあさんには気の毒だが、まずい料理が出るこの田舎にはもうつんざりだと思っている。
- オ おばあさんの料理はまずいので、それぞれが自分に作らせてほしいと思っている。
- カ おばあさんの料理はまずかったが、我慢して食べるしかないと思っている。

問六 —— 線部5「おばあさんは、そんなに尋ねたかつたら親も帰ったことだから、じぶんの家にみんなお帰り、といった」

とありますが、この時の「おばあさん」の心情として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 孫達にもう少しいてほしいという気持ちもあるが、ずっといられても迷惑だと思っている。

イ 口では強がっているが、孫達との生活は楽しく、本当は孫達に帰ってほしくないとと思っている。

ウ 孫達がずっといてくれるのはうれしいが、ハワイでの話を早く孫達にも聞かせてあげたいと思っている。

エ 今まで一生懸命面倒を見てきたのに、親のことはかり気にする孫達にはもううんざりだと思っている。

オ 孫達が田舎での生活に退屈してきたことを痛感し、早く帰らせてあげたほうがいいと思っている。

問七 —— 線部6「みんなにかお土産をみつけることができたのである」とありますが、「わたし」は「わたし」の「お土

産」について、どう考えていますか。「わたし」の「お土産」の内容を明らかにして、七十字以内で答えなさい。

問八 本文における表現の特徴の説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「縦男は、オルガンをひき」「みな子も髪にカラーを巻いたり」というように、「孫達」の行動を丁寧に描くことで、「おばあさん」に対するそれぞれの複雑な思いを描こうとしている。

イ 「知らないよ」「カ」をお出し「など」「おばあさん」の冷淡な口調によって、「孫達」の訪問を本心では迷惑に思っている。「おばあさん」の心情が読者に伝わるように工夫されている。

ウ 「ここは高地で、夏も涼しい」「台所に流れこむ風もすずやかである」など自然を描写することで、できるだけ感情を込めず、事実だけを客観的に描こうとしている。

エ 「古い鍋」「古いオルガン」などによって、田舎暮らしの不便さを強調し、内心では早く家に帰りたと思っている。「孫達」の心情が読者に伝わるように工夫されている。

オ 「清らかな河を渡るように」「じぶんの心が風のように」などの比喩表現を用いることによって、「わたし」の心情が生き生きと読者に伝わるように工夫されている。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある時、狼おほかみ、喉のどに大きな骨を立てて、すでに難儀におよびける折節きりふし、鶴つる、この由よしを見て、「御辺はなにごとを悲しみたまふぞ」と言ふ。狼、泣く泣く申しけるは、「われ喉に大きな骨を立てはべり。御辺ならでは救ひたまふべき人なし。ひたすらに頼みたてまつる」と言ひければ、鶴、くちばしを伸べ、狼aが口くちばしをあけさせ、骨を2くはへて炙いいやと引き出いだす。その時、鶴、狼に申しけるは、「3今より後、この報恩によつてしたしくせむ」と言ひければ、狼、怒つて言ふやうは、「なんでふ。汝なんぢbがなにほどの恩を見せけるぞや。汝cが首くちばし、しやふつと食ひきらむことも、今それがしdが心こころにありしを、助けをくこそ汝eがためには報恩なれ」と言ひければ、鶴、力におよばず立ち去りぬ。

そのごとく、悪人に対してよきことを教ふといへども、かへつて罪をなせり。しかれば、悪人に対してよきことを教へむときは、天道に対して御奉公すと思ふべし。

注 由…いきさつ

御辺…あなた

それがし…私

天道…天の神

(『伊曾保物語』より)

問一 線部 a～e の「が」の中から、他と働きが異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問二——線部1「ひたすらに頼みたてまつる」とありますが、誰が誰に何を頼んでいるのですか。解答用紙の空欄に適切なことばを入れて、答えを完成させなさい。

問三——線部2「くはへてゑいやと」を現代仮名遣いに直しなさい。

問四——線部3「今より後、この報恩によつてしたしくせむ」について、「報恩」とは恩返しのことですが、鶴がこのように「報恩」をとらえているのに対して、狼はどのようなことが「報恩」だと言っていますか。現代のことばで答えなさい。

問五 この文章から得られる教訓として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 悪人に対して善意をほどこす場合、神に対して善意をほどこしたと考えるべきだ。
- イ 悪人に対してまで善意をほどこすような人には、きっと神のご加護があるだろう。
- ウ 悪人に対して善意をほどこそうとする人は、悪に染まらないように気をつけるべきだ。
- エ 悪人に対して報恩を期待するよりも、神から報恩を期待するほうがまだましだ。
- オ 悪人に対して報恩を期待しても無駄なので、悪人を決して助けてはならない。

問五 ———— 線部3「日本ではおよそ逆ではないか」とありますが、日本がどのように「逆」であるかを最も的確に説明した一

文を本文中から探し、初めの五字を抜き出しなさい。

㊦ (41点)

問一 こば む けいだい そそ ぎ 1点×3

問二 甲 イ 乙 ア 問三 テ ン ト の 屋 ぐ 面積 が 広 い こと。 3点

問四 オ 問五 エ 問六 も の ば か り 3点

問七 A オ B イ 問八 オ 問九 b c 完答3点

問十 ウ オ ア エ 2点×4

問十一 (役割) 5点

	と	人
	し	々
5点	で	が
	は	っ
	な	い
	く	捨
	機	て
	能	精
	と	神
	し	っ
	て	に
	し	支
	か	配
	考	さ
	え	れ
	な	、
	く	人
	な	間
	っ	さ
	た	え
	こ	も
	と	実
	。	体

㊦ (41点)

問一 a 専念 b 座敷 c 縮み d 格別 e 深刻 f 迎え 2点×6

問二 A イ B ア 2点×2

問三 孫 達 の た め に 料 理 を つ く る こ と 。

問四 エ 問五 3 カ 4 ウ 問六 イ 3点

問七

考	た	手
え	し	伝
方	っ	う
に	の	こ
良	っ	と
い	お	と
影	土	管
響	産	理
を	っ	す
与	で	る
え	あ	こ
る	り	と
と	、	は
考	そ	違
え	れ	う
て	が	と
い	将	気
る	来	づ
。	の	い
	も	た
6点	の	こ
	の	と
	見	が
	方	っ
	や	わ

問八 オ 4点

㊦ (18点)

問一 b 3点

問二 狼 が 鶴 に のどにささった大きな骨を取り除いてほしい と頼んでいる。 4点

問三 くわえてえいやと 3点

問四 鶴を食べずに生かしておくこと。 4点

問五 ア 4点

